



タイに古墳?

高 谷 好 一

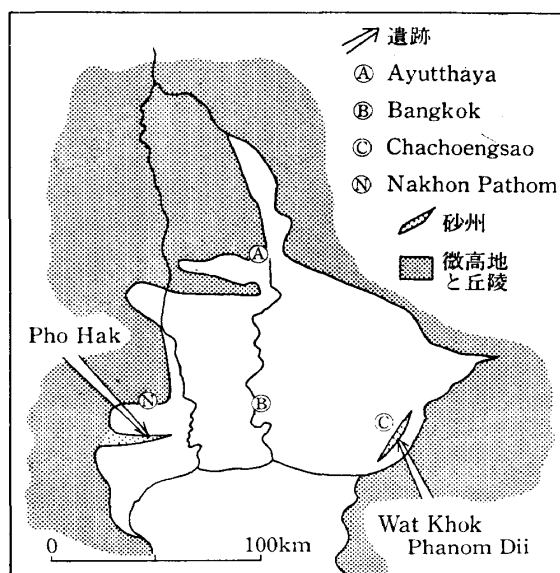
最近の東南アジア研究センターには海域世界の研究というのがある。東南アジアをいままでのように陸側からばかりみないで、海の方から眺めてみようというものである。この動向を私はよいことだと思っている。私自身が、例えばタイ国のような大陸の一部でさえ、山の民、海の民という、2要素の合成としてとらえるべきであると考えているからである。正直いって私は旧来のタイ族南下説一辺倒には反対である。この3月から4月にかけて、稲作環境の調査にチャオプラヤ・デルタを訪れた時にも、頭の片隅にタイ文化における“海洋要素”などということがひっかかっていた。

ここで報告するのは、いわばこの海洋要素はやっぱりあった、というようなことである。先にも触れたごとく、現在までの理解では、チャオプラヤ・デルタの主体部は本来無人の地でそこに人が住みつくのは19世紀以降ということになっている。それ以前の居住地はデルタ周辺の微高地から丘陵にかけてというのが常識である。ところが、今度の旅行中、この無人の地であるべきデルタに、かなり古い遺跡をみたのである。

今回知った遺跡は2カ所ある。一つは Chachoengsao 東南南約 9km の Wat Khok Phanom Dii 遺跡であり、いま一つは、Nakhon Pathom のほぼ真南 20km のところにある Pho Hak 遺跡である。両者とも、その立地や出土品の状況は似たようなものだが、ここでは前者を例にこうした遺跡のあらましを述べてみたい。

人工のマウンド

現在のデルタはその平坦面の全域が一望千里の水田となっているものだが、この中にポツンと高さ12-13mの丘がある。それは直径約300m、緑の木で覆われており、その外見は日本の古墳に酷似している。



二つの遺跡はともに砂州の上に位置している

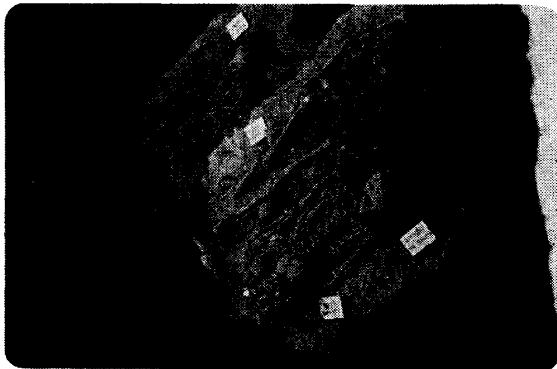
ところで、この丘は完全な人工のマウンドである。丘には切り割りがあって、そこで断面がみえるが、それによると、2-3cm ぐらいの薄層がほぼ水平に何十枚も重なっている。ある層はベンガラ色をし、別の層は暗灰色で、また別のは白色に近い。奇妙なことに、これらの層は、どれもこれも出来の悪いレンガのようにみえる。どうやら、2-3cmの厚さの砂質粘土を敷きつめては、その上に草や木を置き、それを燃やし、またその上に別の土の層を置いては焼くといった作業を何回も繰り返して、このマウンドを完成したと考えたくなるような地層の積み重なりになっている。各層にはしばしば炭や灰が含まれている。このマウンド全体がこうして作られているのかどうかはわからないが、少なくとも切り割りのある南端部近くではそういう構造になっている。

このレンガ薄層は、しかし、ところどころで大きく乱れている。そういうところには土器片とアカガ

イの混合物が厚さ1-2mでレンズ状に入っている。アカガイのほかに各種の海の貝殻と蟹の爪も含まれている。

埋葬された遺体

このマウンドの南端に近いところに発掘個所があり、竪穴状に掘られた中から少なくとも5体の人骨が出ている。遺体はまだその場に置かれているのでよくみえるが、5体は皆同じ方向を向いて横たわっている。それらは、お互いに1-2mしか離れていな



Wat Khok Phanom Dii で発掘された人骨

いが、埋められている深度が異なる。最も浅いものは、地表下約1.5m、別の遺体はそれぞれ2.3mと2.5mぐらいのところに埋められている。私は、この中の1体はとくに大柄で、いまのタイ人よりははるかに背が高いように思えた。竪穴の壁にも別の2体ぐらいが見えるような気がしたが、これは確かではない。

土地の人たちの話では、Pho Hak のマウンドからは100体以上の遺体が発掘されたという。

3800年 B. P.

どういう根拠でいわれているのか知らないが、この Wat Khok Phanom Dii の遺跡を発掘した Chachoengsao の教育大学の案内板によると、ここの遺跡の年代は「3800年 Before Present」ということになっている。

米はなさそう

切り割りからは薄手のツボ類の破片が多量に出、それとは別に、厚さ2cmぐらいのタイル状の土器が少量出ているが、これには、私のみた範囲では稲粃らしいものは見当たらない。むしろ、食料品に関係するものでは圧倒的に貝、蟹などの類が多い。

砂州上の立地

地形を研究する私はこの項目に関しては少し自信を持って発言しうる。遺跡は海岸砂州の上に位置している。

前記のように遺跡周辺は極めて平坦な水田である。しかし、よく注意してみると異状に気づく。このあたりにはココヤシの点在する帯が南北に延びる。さらに注意してみると、このココヤシ帯の付近にのみ水田裏作に瓜や緑豆が作られている。地盤はどうやら、周辺より0.5mぐらい高く、砂質でもある。これらの全ては、南北に延びるこのココヤシ帯がかつての砂州であることを暗示している。ところで、この近くにある水路の土壌断面は、実際ここが海にできた砂州に相違ないことを明瞭に証明する。以下は地層断面である。

地表 -0.5m : 砂

0.5-0.6m : 粘土質砂

0.6-1.0m : 多量 of 海棲貝と甲殻類の破片を含む砂

1.0-1.2m : 植物遺体を含む粘土質砂

1.2-2.0m+ : 堆積当時の蟹の巣穴かと思われるものを有する砂

ところで、ココヤシ帯の東と西に広がる水田部は全く別の地層を示す。それは以下の通りである。

地表 -0.3m : 暗灰色砂質粘土

0.3-0.6m : 多くの赤色斑紋を有する白色の砂質粘土

0.6-1.2m+ : 極めて多くの黄色の斑紋を有する紫がかった灰色の粘土

この赤斑を持つ白色粘土と黄斑を持つ灰色粘土の組み合わせは硫酸酸性土壌の典型的断面であり、これは、この粘土が汽水中に堆積したことを示している。私は、かつてこの種の汽水成粘土をC14を用いて測定したことがあるが、それによると、粘土はだいたい数千年から5-6千年昔に堆積したということになっている。

ところで、この砂層と汽水成粘土層の分布を地図上に落してみると、約5千年昔のこのあたりの古地理に関して次のことがいえる。すなわち、Amphoe Phanom Sarakham から Amphoe Phanat Nikhom にかけて、いわゆるデルタの東縁を画する丘陵が南北に延びるのだが、これを西に離れること、5-6km

のところに1本の砂州が南北に延びていて、砂州と丘陵の間には汽水性の潟が広がっていた。そして砂州の西側は直接、当時のタイ湾になっていたと。砂州は1本ではなく、何条かがあった可能性が強い。しかし、この場合もなお、砂州群は丘陵とは切り離された、いわば海中の砂州であったはずである。

上の推定が正しいとすると、3800年 B. P. というこの遺跡は、できあがったばかりか、もしくは生成中の砂州の上に作られた遺跡ということになる。

Pho Hak の砂州

Pho Hak の遺跡も砂州の上にのっている。しかし、この砂州は私の観察では東西に延びる古い砂州だ。二つの砂州は、生成時代、形態が少し異なるが、両者ともその片側を外洋に露出するような形で延びていた海の砂州であったことには間違いはない。

以上が、私の今回みた遺跡の概要である。遺跡の機能そのものについては、いまの私にはわからない。ただその立地はどう考えてみても海に直結したもの

である。私はこの遺跡をみながら、かつて訪れたことのある Oc-Eo とメコン・デルタ南端の砂州のことを思い浮かべていた。Oc-Eo はいまではメコン・デルタの真ん中に閉じ込められているが、それが栄えていたところは海中に浮かぶ花崗岩の小島であったはずだ。あのすぐ近くには、ごく最近、陸化したとみられたカキの礁が水田中にある。圧倒的に優勢にベトナム人の占居するデルタの中でそこだけ島状にクメール人が閉じ込められているあの Ba Xuyen から Ca Mau にかけて延びるメコン・デルタの砂州、あれも古くからの海の民の居住の可能性を強く感じさせる。3800年 B. P. の遺跡、2千年前の Oc-Eo、それに現在のクメール人の砂州と並べる時、そこには大きな時代のずれがある。しかし、それにもかかわらず、私は、そこに古代海域世界の一つの核を感じたくなるのである。

(京都大学東南アジア研究センター教授)

Brief Impressions of Japan

By Chang Tang

On November 30, 1979, I arrived in Japan as the first Chinese visiting scholar to the Center for South-east Asian Studies, Kyoto University. Kyoto City, the old capital of Japan, has a rich cultural background. It is also known as a center of modern science and culture. Here in this city, I not only saw a beautiful, snow-covered Kyoto and pretty cherry blossoms, but also made countless Japanese friends. I can hardly forget the warm reception they extended to me and their dedication to their work.

The Center provided me with good working conditions, and I was deeply impressed by the enthusiasm shown by everyone there toward furthering research in and about Southeast Asia. As a meteorologist, I was interested in learning the latest developments in Japanese meteorological science. Through the

Center and assistance of Prof. Chotaro Nakajima of the Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University, and Mr. Tetsuzo Yasunari of the Center, I was able to visit other universities and research institutes, among them the Institute of Geoscience, Tsukuba University, the Geophysical Institute, the University of Tokyo, Japan Meteorological Agency (Meteorological Research Institute, Meteorological Satellite Center, Computer Room, Forecasting Section, Osaka District Observatory, Osaka Airport Station), and Yodogawa River Dams Control Office. The discussion I had with Dr. Koichiro Takahashi, one of the most distinguished members of this field, was a most enlightening one.

In Japan great emphasis is placed on scientific research, training and education of useful men. Therefore, at all age levels in every field, there are